

通 教 月 報

診 療 情 報 管 理 研 究

平成26年11月号

編 集

発 行 人

武田 隆久

〒102-8414 東京都千代田区三番町9-15

一般社団法人 日本病院会 通信教育課

TEL 03-5215-6647 (受講生専用)

FAX 03-5215-6648 (受講生専用)

URL <http://www.jha-e.com/>

受付時間

9:00~17:00  
(ただし、土・日・祝祭日、年末年始は除く)

発行日

毎月1日

定 価

1部 150円 1カ年1,600円(税込・送料込)

郵便振替

00190-5-396045

名 義

一般社団法人 日本病院会 通信教育部

## 「名前」をつけるということ

吉住 秀之

独立行政法人国立病院機構九州医療センター  
医療情報管理センター部長

医師として日常診療を行っている、患者さんから子供や孫の誕生の話折に触れて何う機会がある。誕生とともに話題になるのが決まって名前のお話で、このときは普通の病気のことはさておきしばし微笑ましい会話に花が咲く。「賢く育てたい」とか「健康に育てたい」という親心で命名に心を砕く様子を見ると、子を授かる側にとって命名とはもう一つの生みの苦しみでもあるようだ。なぜならそれは責任を伴う創造だから。

人であれものである、新たに現れる対象に対して名前をつけるということは、この世界にその対象を位置づけるということであり、たとえ仮初めではあってもその対象が存在していくことを認めることに他ならない。一旦名前をつけられればその対象はそれ以外には存在できない形でこの世界に存在し続ける。その対象に向き合うときまさに名前はその対象の前に立ち上がるのである。

振り返ってみると、臨床現場では医師はもちろん診療情報管理士は日々患者が背負う診断名という「名前」を通して患者に向き合っている。実際に患者に接する医師に比べれば、もっぱら診療録の診断名を通して患者に向き合う診療情報管理士の場合、診断名というものはその分重要性が大きいだろう。診療行為が行われるごとに、つけられていく診断名は、まさに患者がこの世界に生き続けている間背負っていく名前であり、疾患によっては、診断名はその人の人生を変える力もある。一昔前までは、癌という「名前」が本人を前にして口にすることも憚られていたということはそれを雄弁に物語っている。患者が煩っている病状に対して「名前」を付けることで、希望の火を灯すこともできれば、絶望の淵に追いやることもできるのである。それくらい診断を下すという行為は重い。だから診断名を文字にして診療録に残すということは、歴史を刻むことだと言っていい。こういう言い方をあなたは大笑いするだろうか。診断名を扱うことは私たち医療職にとっては、あまりにも日常的なことになってしまっているが、患者にとっては非日常なことであることに常々気を配る必要がある。

さらに時を変え場所を変え私たちの前に現れる十人十色の患者は、一つの診断名を付けられると、共通の病像をもった一つの集合体となる。この集合体から得られる様々な診療情報は、蓄積され解析されることで新たな知見を生み出し、次世代の治療へと役立つことになるし、そこからまた新たな診断名が生まれることがある。名前が未来を創造していくのである。

こうしたことを考えると、診断名を扱うときに、それに相応しい専門的知識を使えることが要求されることは当然であろう。それはある場合病気についての解剖学的知識であったり、ある場合は統計学的知識であったりする。診断名という「名前」を扱うことに高度の専門性が要求されることが自他共に認められる環境になったとき、診療情報管理士という「名前」の国家資格が生まれることだろう。

